

幼児たちから学ぶ

かずかずのこと①

——水色のノートから——

丸山ふみ

はじめに

編集部から「保育の中で出会ういろいろなことを書いて……」というお便りをいただきましたのは昨年末のことでした。それからしばらく迷いましたが、伊勢富士と呼ばれている堀坂山が園庭からみえる幼稚園で幼い日を過ごす三百余名の幼児たちが、私共十三名の保育者に教えてくれる数々のことをメモしている水色の表紙のノートからまとめてみることで、自分の保育者としての仕事の反省にしたいと心にきめました。

幼児の眼

曇りのない幼児の目にうつる大人の生活を彼らは独特の

判断をもって自分たちの世界に再現しようとする”（『小さい者の声』柳田国男著）

私はこの一節が大好きで、幼児の視線をうけたり、幼児が何かをじっと見ている姿に出会ったりするたびにこの文が心の中に浮かぶことが多くあります。

四月なかば頃、入園当初のあわただしさがしだいに消え、園内にや々と安定した時間がやってきたと思いつつ職員室の前に立って園庭をみていますと、年長児になったみな子と和子がそれぞれ両手をくっつけた掌一杯桜の花をもって園舎裏からやってきました。

園舎裏には桜の木は三本あるのですが、いずれも樹齡が若くてまだ数多くの花をつけるまでにはなっておりません。

まして花を捨てるような場所ではないので二名の女兒の嬉しそうな表情に反して、「まあ、きれいな、どこにあったの」と聞いた自分の声のひびきには優しさがありません。

しかし、みな子はさわやかに、「あんな、おいてあったん。そやけどもう園長先生の分はあらへん（無い）」と私の顔に、私の気持とは別の世界の人のような視線を投げて、砂遊び場にいる担任のところへ走り去っていきました。

「あんな、おいてあったん、そやけどもうあらへん」と幼児の口調をくりかえしながら園舎裏へまわってみました。

園長というのは、なかなか毎日の保育全体の流れの中で自分の占める位置はなく、幼児からかかわってくれるのを待ったり、それぞれの先生の計画からはみ出している幼児たちをその組の活動へ誘導していくことで自分もまた研修しているのだと考えています。

この日も、保育者として幼児と同じ目の高さでものを見なければならぬ、幼児は常に下から見あげており、大人は上から見おろしていることを自覚しているつもりでも失敗したのです。

桜の枝が一本折れていたのです。だから、まさしく置いてあったのです。きつといつも頭の上に咲いている桜の花が、草の上にあったのですから、きつとふたりで摘んだのでしょう。その枝の落ちていた場所に自分がしゃがんでみて幼児のあの嬉しそうな眼がわかったのです。

幼児の生活から

じゃんけんしようと言葉での提案が年少児でも早くから出

るようになったけど、さて、じゃんけんになると石とはさみがあやふやでトラブルがおこる。石とはさみを自分では意識しているけど指に力が入っていないと、四歳児担任のA先生が嘆くと、M先生が私も今日失敗したのよ、ぶらんこに乗っている安代ちゃん後から押したらね、しっかり握っていないかっただのね落してしまっただのよ等々、幼児が帰ったあと幼児たちのことが話し合われる。

幼児から学ぶことで保育者として成長していくといわれませんが、幼児は実にいろいろな問題を提供してくれます。それは教育課程を編成していく上できわめて貴重なことだと思っています。

早くから鋏が使える四歳児の久司は担任が「何ができるの」とたずねたら「ほこり」と答えて担任をがっかりさせました。

幼児が生活している家庭や地域社会が変わっていくなかで幼児たちの心や身体の発達も変わっており、変えることが良いのか悪いのか、失敗した実践や、園内でよかったねと喜びあったことに御批判や御指導を皆様からいただきますようお願いいたします。

(松阪市立松江幼稚園)